

純ちゃんのコーナー
(ロータリー3分間情報)
Part V



伊丹ロータリークラブ

深川 純一

目 次

1. 『良質な原理の復活』	2
2. 『個人奉仕と団体奉仕』 その1	3
3. 『個人奉仕と団体奉仕』 その2	4
4. 『個人奉仕と団体奉仕』 その3	5
5. 『個人奉仕と団体奉仕』 その4	6
6. 『個人奉仕と団体奉仕』 その5	7
7. 『個人奉仕と団体奉仕』 その6	8
8. 『団体奉仕と政治問題』 その1	9
9. 『団体奉仕と政治問題』 その2	10
10. 『団体奉仕と政治問題』 その3	11
11. 『国際奉仕』 その1	12
12. 『国際奉仕』 その2	13
13. 『国際奉仕』 その3	14
14. 『国際奉仕』 その4	15
15. 『国際奉仕』 その5	16
16. 『国際奉仕』 その6	17
17. 『国際奉仕』 その7	18
18. 『会員増強について』 その1	19
19. 『会員増強について』 その2	20
20. 『クラブ財政と会員増強は無関係』	21
21. 『例会出席の意味』	22
22. 『ロータリアンとは』	23
附. R I 会長代理挨拶並びに R I 現況報告	24

序 に 代 え て

今から5年前の7月に当クラブの時のロータリー情報委員長竹中秀夫会員の発案によりまして、ロータリー3分間情報を『純ちゃんのコーナー』と名付けて発足致しました。それから早くも今年で5年の歳月を閲することになります。まさに「光陰矢の如し」であります。その間、クラブの皆々様の温かい友情と寛容のお心により、浅学非才をも顧みず、何とか雑駁な知識をもって説き続けてまいりましたが、顧みて、誠に内心忸怩たる思いでございます。

元来、ロータリーというものは、色々な側面を持っていますから、色々な視点から分析しなければなりません。先ず、ロータリーは過去100年の歴史をもっていますから歴史の視点があります。そして、ロータリーは一つの思想でありますから思想の視点から分析しなければなりません。そして、ロータリーは巨大な組織であります。したがって、組織の視点からも分析しなければなりません。そして最後に、ロータリーは実践しなければなりません。したがって、実践の視点からも分析をしなければなりません。

このように、ロータリーを説くには、本来、体系的な分析と知識が必要なのであります。しかし、これを例会毎の3分間で説き明かすことは不可能であります。そこで、当初から全くの行きあたりばったり、思いつくままに話す格好になってしまったのでございます。ただ、思いつくままに話したといっても、私は、あくまでもロータリーの原理に則って話してきたつもりでございます。

なお、昨年度は、年間22回しか話すことが出来ませんでしたので、全体としての内容がやや乏しくなりました。

そこで、22回分の話に加えて、今年1月31日～2月1日に東京のホテルニューオータニで開催されましたR I 第2580地区（東京都・沖縄県）年次大会にR I 会長代理として出席致しました時の「R I 会長代理挨拶並びにR I の現況報告」の一文を巻末に付け加えさせていただきました。誠に拙いものではございますが、併せて御高覧賜りますれば幸甚に存じます。

終わりに、この一年間、私の拙い話を辛抱して聴いて下さったクラブの皆様様の友情と寛容に心から感謝致しますと共に、この小文集の発刊に御尽力いただいた竹中秀夫会員・中島勝美会員初めクラブ事務局の人達に心からなる感謝を捧げ擲筆致したく存じます。

1. 『良質な原理の復活』

ロータリー運動は、恰も時計の振り子のようなものであります。ロータリーの振り子は、時代の変遷に従って、ある時は右へ振れ、ある時は左へ振れて来ました。しかし、振り子は、何時かは、また元の中心へ戻るものであります。

ところで、ロータリーの原理の核である一業一会員制の原則は、ロータリー創立以来95年経って2001年の規定審議会において廃止になりました。これは、一つの時代のエポックとして、ロータリーの振り子が振り切ったことを意味します。

では、次は何時元の中心へ戻るのか。95年のスパンで戻るのか。それは判りません。

しかし、廃止になった一業一会員制の原則は、ロータリーの本質に根ざした原則であります。したがって、これは良質な原理であります。

世の中の現象は時々刻々として変化します。したがって、一業一会員制の原則も現象としては、一時的には消滅しました。しかし、一時的に、現象としては消滅しましたが、良質な原理としては存在しているのであります。

したがって、良質な原理はいずれ時代を超越して必ず復活するものなのであります。例えば、紀元前3世紀から紀元後3世紀にかけて隆々と栄えた古代ローマ帝国は、紀元後

3世紀に滅亡しました。しかし、ローマ帝国は、滅亡の直前にローマ法という素晴らしい法典を作り上げていたのであります。

そして、その法律に内在する所有権の原理は、現代の日本の民法206条にそのままの形で受け継がれているのであります。即ち、民法206条は、所有権を定義して、『所有権とは、自分の物を自由に使用、収益、処分することの出来る権能を謂う』と規定しています。

実は、ローマ帝国が滅亡したことによってローマ法という法典はなくなりましたが、その法律に内在する所有権の原理は、1700年の歳月を超えて、今の私達の民法にそのままの形で復活しているのであります。

したがって、ポール・ハリスが開発した一業一会員制の原則も、その原理が良質であるが故に、何時かまたロータリーの世界に復活するものと思うのであります。

昨年度の国際ロータリーのテーマは、ロータリー創立100周年に当たって、『ロータリーを祝おう』というものであります。その趣旨は、単にお祭り騒ぎをするのではなく、過ぎ去りし100年を回顧し、そして反省し、よりよきロータリーを築き上げる覚悟を新たにするものでなければならぬと思うのであります。そうでなければ、ロータリーは、21世紀に崩壊してしまうだろうと思うのであります。

2. 『個人奉仕と団体奉仕』 その1

ロータリーの奉仕を考えると、個人奉仕と団体奉仕とは何処が違うのか、という両者の特徴を明らかにしておかなければならないと思います。まず、第1に、個人奉仕は、クラブ財源の制約を受けません。個人奉仕は、全て手弁当・ポケットマネーで奉仕するのであります。ニコニコ箱の財源は殆ど役に立ちません。何故かと言うと、これではコミュニティニーズの全てに手当が出来ないからであります。

ロータリアンの個人奉仕は、元来、ボランティアアクティビティであります。これが、社会的信用の高かった所以であります。ロータリアンは、金を出すべき時には思い切って出します。財源的には、個人で奉仕するからやり易いのであり、大きなことが出来るのであります。クラブの団体奉仕のニコニコ箱では、殆ど何も出来ません。

因みに、元R I理事の今井鎮雄先生は、兵庫県の播磨地方に重度身体障害者の施設を設立して欲しいという要請を受けられました。そこで、先生は、先ず、企業や団体を廻って約6千万円の寄付金を集められました。そして、それを基にして国から2億5千万円の助成金を引き出され、更に、それを担保として福祉振興財団から2億5千万円の融資を受けられ、合計5億6千万円の資金をもって、姫路の播磨の里に重度身体障害者施設『はりま自立の家』を建設されたのであります。

そして、その3年後、今度は、阪神地方の重度身体障害者の親の要請があり、先生は、前回と同じようにして約7億2千万円の資金を集めて、『はんしん自立の家』を建設されました。

更に、数年後、兵庫県の宍粟郡に知的障害者施設建設のニーズが起り、先生は、今度は約7億6千万円の資金を集めて『しろう自立の家』を建設されたのであります。

要するに、今井先生は、一人で20億円以上の資金を集めて個人奉仕を实践されたのであります。このようなことはクラブの団体奉仕では絶対に出来ないことなのであります。クラブでは、精々ニコニコ箱の数百万円が限度であります。個人奉仕の方が団体奉仕よりも遙かに大きなことができるのであります。したがって、『一人では何も出来ない。しかし、一人が始めなければ何も出来ない。その一人になろう』という言葉がありますが、これは、明らかに団体奉仕を志向するものであります。したがって、個人奉仕では何ともならないからクラブで団体奉仕をしよう、クラブでも何ともならないから地区レベルで団体奉仕をしようという気持が少しでもある間は、未だロータリーが身についたとは言えないと思うのであります。ロータリーの本体は個人奉仕であります。したがって、ロータリアンであれば、個人奉仕の絶対性を信奉すべきであります。

3. 『個人奉仕と団体奉仕』 その2

前回は、個人奉仕はクラブ財源の制約を受けないことを申し上げました。そこで第2に、個人奉仕は、テリトリーの制約を受けません。個人奉仕は、ロータリアンの所在地が奉仕の実践の場でありますから、世界中何処でも実践出来るのであります。

これに対し、団体奉仕は、テリトリーの制約を受けますから、テリトリーの外で実践することは出来ません。テリトリーの外で団体奉仕を実践する時は、そのクラブとジョイントプログラムを組まなければならない、その時はガバナーの承認を得なければなりません。これは、R Iの情報媒介機能を使わなければならないので、面倒であります。

では、その時どうするかと言うと、個人奉仕でやればよいのであります。

殊に、クラブの事業計画に組み込まれた個人奉仕は、テリトリーを多少は超えても差し支えありません。もし、他クラブから文句を言われても、あれは個人奉仕であると言い逃れが出来ます。しかも、個人奉仕としてクラブの事業計画には組み込まれているのであります。このように、個人奉仕は、非常に柔軟であります。

因みに、前回申し述べました今井元R I理事の個人奉仕による身体障害者福祉施設は、何れも今井先生の所属しておられる神戸西ロータリークラブのテリトリー外であります。

第3に、個人奉仕は、政治活動が自由であり

ます。個人奉仕であれば、請願書の提出、陳情、国庫助成金獲得運動その他の行動が自由自在に出来るのであります。

因みに、今井元R I理事の個人奉仕による『ひょうご障害福祉事業協会』は、何億円という国庫助成金によって建築され、運営されているものであります。

これに対して、団体奉仕は、標準クラブ定款第12条「政治禁の原則」によって禁止されています。したがって、クラブの団体奉仕としては、一銭の国庫助成金も受けることは出来ないのであります。

第4に、個人奉仕は、他団体との連携が自由であります。

これは個人奉仕だからこそ自由に出来るのであります。団体奉仕の場合には、団体の目的が漠然となるようなジョイントプログラムは、組むことができません。

なお、団体奉仕でライオンズクラブと提携することは、原理的には可能であります。しかし、現実の問題としては、ライオンズクラブの方が乗ってこないだろうと思われれます。個人奉仕であれば、ライオンズクラブとの提携も自由自在に出来るのであります。

以上のように見てきますと、どの点をとっても、個人奉仕の方が融通無碍で、やり易いのであります。ただ、ロータリアンにそれをやる気がないというだけのことであります。したがって、ロータリーでは、個人奉仕が様にならないのであります。

4. 『個人奉仕と団体奉仕』 その3

個人奉仕と団体奉仕に関連してロータリーの奉仕の核心にある問題点を指摘しておきます。

1978～79年度の国際ロータリー会長クレム・レヌーフは、3 Hプログラムを提唱しました。3 Hとは、Health Hanger Humanityの略語であります。彼は、このプログラムを提唱して全世界のロータリアンに呼びかけました。

『ロータリアンが個人奉仕で百丁の鉄砲をポンポン撃っても大したことは出来ないだろう。しかし、この百丁の鉄砲を 国際ロータリーが一門の大砲に煮詰めてズドンと撃てば、遙かに大きな効果が得られるだろう。したがって、全世界のロータリアンよ、このプログラムに寄付をしてください』と提唱したのであります。

この提唱は、ロータリーの原理に反すること明らかであります。何故かと言いますと、個人奉仕を鉄砲に例えること自体も間違っていますが、仮に、それを前提としても、ロータリーは、百丁の鉄砲を一門の大砲に煮詰めるという発想を未だかつてもったことがないのであります。これは、明らかにライオンズクラブの団体奉仕の発想であります。

ロータリーの考え方は、百丁の鉄砲を一門の大砲に煮詰めるのではなく、一丁の鉄砲を一門の大砲に育てていく発想であります。したがって、百丁の鉄砲であれば、百門の大砲

に育てていくのがロータリーの基本的な考え方なのであります。

このように、ロータリーの奉仕は、所謂、育てる奉仕なのであります。百人の個人奉仕を一つの団体奉仕に煮詰めるのではなく、一人一人のロータリアンをそれぞれ百門の大砲のような立派な人間に育てていくのであります。

では、一体何処で育てるのか。言わずと知れたこと、それを育てるところがロータリークラブなのであります。これがロータリーの基本原理であります。

1974～75年度の国際ロータリー会長ウィリアム・ロビンスWilliam R.Robinsは、『ロータリークラブの価値は、そのクラブが地域社会に対して、どのような貢献をしたかによって決まるのではなく、そのクラブがどのような立派な人間を育てたかによって決まるのである』と言っているのであります。

ロータリーは、ライオンズのWe serve になったものではありません。百丁の鉄砲の例で言えば、一つのWe serve ではなくて、百の

I serveの集合であります。ライオンズとは、奉仕についての発想の基盤が全く違うのであります。ライオンズの奉仕は団体奉仕、ロータリーの奉仕は基本的に個人奉仕であります。私達は、個人奉仕の絶対性を信奉しなければならぬと思うのであります。

5. 『個人奉仕と団体奉仕』 その4

個人奉仕についても団体奉仕についても、一点注意すべきことは、一般的に言って、『恵む奉仕』『与える奉仕』は奉仕性が弱いということでもあります。即ち、

1907年、初期のシカゴのロータリアン達は『我らの親睦のエネルギーを世のため人のために』という発想に取り付かれて行動を起こしたわけですが、世のため人のためにということは、一体何をすればよいのか。

当時は何らの先例もありませんでした。そこで、素朴で善意なロータリアン達が考えたことは、世の中には恵まれない人達や社会の歪みに落ち込んで救済を求めている不幸な人達がいるから、それらの人達が欲しがる物を与えることが世のため人のための『奉仕』になるのではないかと考えたのであります。これを『恵む奉仕』と言います。

この『恵む奉仕』は、ロータリアンとしては、どうしても実践しなければならないことであり、避けて通ることの出来ないことではあります。これを金銭の投下によって行う場合は、奉仕性が非常に弱いということに注意しておかなければなりません。

したがって、その実践のやり方については、色々と考えなければなりません。単に金を与えればよいというものではありません。思いやりをもって地域のニーズに合わせて、しかも、受益者に自立心を育てるようにしなければならぬのであります。

第1回ロータリー世界理解賞を受けられた

岩村昇先生の話を紹介しておきます。

岩村先生は、バングラディッシュに戦争が起きた時、草の根の人達と共にバングラディッシュに行って、難民のための『給食センター』を作りました。

ところが、世界中から援助を貰いすぎたために、上は大臣から、下は給仕に至るまで、貰い得の乞食根性になってしまっただけで評判が悪くなり、援助が止められてしまいました。

その結果どうなったかと言いますと、給食センターが出来た村の子供達は、ドラム缶の粉ミルクが来なくなったので、飢えて死んで行ったのであります。

これに反して、辺鄙な村であったために『給食センター』が出来なかったところは、もともと自給自足でやっていたので生き延びることが出来たのであります。なまじっか給食センターが出来たばかりに飢え死にした結果になったのであります。

私達は、皆、自分の人生は自分で責任がもてるように、神様から秘められた可能性即ち、Talentを与えられているのであります。タレントTalentの本来の意味は天分であります。それを開発するのは、先ず、それぞれが自分の人生は自分で責任を持てるように、そのような心を育てなければなりません。即ち、『自立心の育成』であります。これが社会奉仕、更に世界社会奉仕の基本なのであります。

6. 『個人奉仕と団体奉仕』 その5

前回は、第1回ロータリー世界理解賞を受けた岩村昇先生の話を紹介しましたが、「自立心の育成」について、もう一つ先生の話を紹介しておきます。

カンボジア難民キャンプの後をどうするか、という国連の会議があったときに、カンボジアの母親が言いました。

「確かに、緊急時には世界中からの援助物資が有り難かったのです。給食センターに空きっ腹で行けば、当てがい扶持がもらえましたし、裸で震えている身体で行けば、日本から来た古着をお仕着せしていただきました。

しかし、緊急時が去った今になっては、それだけでは駄目だということが判りました。何故かと言うと、家の娘は、もう7歳にもなったのに台所の手伝いが全然出来ません。

カンボジアの村が平和であった時には、娘は、5歳、6歳、7歳と、母親の台所姿を後ろから見て、7歳にもなれば台所の手伝いが出来るのが普通でした。

しかし、今、平和になったカンボジアの村へ帰って、台所を作り、村を起こそうという時になって、母親から娘に伝えなければならない生活の知恵の鎖が断ち切れてしまっています。

「今から必要なのは、自分の人生を自分で作っていく自立の方法です」と。

要するに、困っている人達を救済する社会

奉仕について重要なことは、ただ単に物や金を恵む奉仕は奉仕性が弱いのでありまして、物や金を恵むという段階で止まっているは駄目であり、それと同時に自立の道を教えなければならぬのであります。

結論としては、「恵む奉仕」「与える奉仕」は、ロータリーとしては避けて通れないものでありますが、それを実践するについては、単に金を出すだけにとどまらず、相手の身になって、相手から謙虚にニーズを学ぶ気持がなければなりません。そして、相手に自立心を育てることが肝要なのであります。

したがって、例えば、身体障害者に対する奉仕についても、弱いものを締め出さずに作り合うことは、私達が社会の一員として為すべき当然の義務であり、責任であります。

したがって、ハンディキャップをもった身障者に対するボランティア活動が特別な行為として存在し続ける限りは、身障者もやはり人間の中で特別な存在であり続けることになるのであります。共に生きる人間として、支え合って生きていくための援助の手段や方法を、相手の身になって提供していくことがロータリアンに課せられた使命であると思うのであります。その心が育たない限り、如何に制度や施設が整備され、発展しても、福祉社会は到来しないのであります。

7. 『個人奉仕と団体奉仕』 その6

前回に引き続いて、岩村昇先生の話をもう一つ紹介しておきます。

それは、ネパールの草の根の人達自身のボランティア活動によって、自分達を貧困から解放し、飢えから解放するという自立のボランティア活動がネパールの村で起こったという話であります。それは、桜井さんという日本人女性の栄養士がボランティアとして播いた種が芽生えた物語であります。即ち、

ネパールでは、折角、BCGを打っても、体内に、免疫を作る材料になる蛋白質が足りないために免疫が出来ず、結核に犯されて命を落としてしまいます。

しかも、ヒンドゥ教徒は牛肉が宗教上のタブーであり、回教徒は豚肉がタブーであります。そこで、岩村昇先生は、ネパールで誰でも食べられる大豆の蛋白質を何とか採り入れたいと桜井さんに頼みました。

ところが、ネパールのように9ヶ月も雨が降らない乾燥地帯では、味噌も醤油も作れません。そこで、桜井さんは色々苦心の結果、キナ粉の活用を思いつきました。

ネパールでは、昔から、トウモロコシを火で焙り、石臼で挽くトウモロコシコガシという食習慣があり、これとよく似た大豆蛋白のキナ粉は、抵抗なくネパールの人達に受け入れられたのであります。

桜井さんは、女性として、女性の悩みがよく判ります。栄養失調の赤ちゃんを連れてお母さん達と一緒に、掘っ立て小屋に栄養教室を作りました。いつの間にかこの草葺小屋がリハビリテーション・センター Rehabilitation center という英語で有名になりました。

鉄筋のビルディングでなく、草の根のお母さん達の台所と全く同じ草葺小屋であったことが普及した第一の原因でありました。何故なら、センターで習ったことが、自分の家の台所でも出来るからであります。センターで身につけたことは、生活の現場で明日からでも直ちに実践出来なければ何にもならないのであります。

桜井さんが、ソッと手を貸したことによって、草の根のお母さん達は、自分で作ったトウモロコシコガシ、小麦コガシ、大豆コガシ（キナ粉）の三種混合栄養食で子供達を栄養失調から守ったのであります。

そして、そのお母さん達の中からボランティアが生まれました。ボランティアがボランティアを生んだのであります。ロータリーの奉仕は、この最初の知恵を出すことであります。そして、先ず、自らボランティアとなることであります。身体が動かなければ知恵を出すべきであります。これがロータリーの個人奉仕であります。

8. 『団体奉仕と政治問題』 その1

団体奉仕は、標準クラブ定款第12条によって、政治性の強い事柄については実践することが出来ていないことになっています。

これに対して、個人奉仕は、政治行為が自由であります。ロータリアンが個人奉仕で運営している施設に政党から寄付金を貰うことは一向に差し支えないのであります。

ところが、団体奉仕は、政治的な色彩の強いテーマを実践することは出来ません。

では、団体奉仕と政治性の問題をどのように考えればよいのか、と言いますと、団体奉仕の中で、政治性の含まれないものは存在しない、と理解すればよいのであります。

例えば、ロータリークラブが老人ホームに寄付します。政治性がないように見えます。しかし、共産党の立場からすると、これら福祉のニーズは全て国家財源によって賄われるべきものであります。日本国は、私有財産の絶対性を前提に組み立てられた社会でありますから、その社会的弱者の救済は、富める人の慈悲心で救済することになりますが、共産主義社会になれば、慈悲心など不要であります。これらのことは全て国家財源で決着がつくのであります。したがって、共産党を支持してほしい。老人ホームに寄付金を持っていくことは止めてくれ、ということになれば、これは政治問題であります。

そこで、団体的な社会奉仕は、悉く政治性を帯びるといえることになると、ロータリーの

団体奉仕は、政治性を帯びるが故に、企画、立案、実施出来ないこととなります。

ロータリーは、この問題に苦しんで、1915年頃までには、これについての原理を立てているのであります。即ち、問題の中に含まれる政治性には、全て濃淡があります。

そこで、ロータリーは、政治性が一定程度以下に弱いものを、ロータリーの立場から政治性がないと認定するのであります。これは、一刀両断の理論であって、ロータリーが一方的に認定するのであります。即ち、政治性が一定程度以下に希薄なものは、ロータリーの立場から政治性がないと考えるのであります。

したがって、共産主義者から政治性があると言われても、奉仕の実践をするロータリーの立場からすると、理想社会のことを論じても仕方がないのであって、現に社会があり、その中で私達は、弱者救済の問題例えば老人問題を抱えているのでありますから、ロータリーは、運動の主体として、主体的な判断に基づいて、この程度の問題は政治性がないと認定するのであります。したがって、何らロータリーの政治からの中立性を犯すものではない、と考えればよいのであります。

すると、ロータリアンは、大悟徹底して、一定の分野においては、団体的な社会奉仕を自信をもって企画、立案、実施することが出来るわけであります。

9. 『団体奉仕と政治問題』 その2

今回は、団体奉仕における政治性の濃淡に就いて申し述べました。そこで、従来、ロータリーが、団体奉仕の分野で、政治性が希薄なるが故に政治性がないと認定してきた分野は一体何か、と言いますと、Guy Gundakerの【ロータリー通解】には、その適用例が明快に示されています。即ち、環境衛生問題、老人対策問題、青少年育成問題、交通安全問題等は政治性が希薄であるとされているのであります。

ただ、これらの中でも、政治性の問題は流動的でありまして、時には政治性が高まるものもありますから、政治性のチェックについては、特に注意しなければなりません。

例えば、公害問題であります。

Guy Gundakerの本には、公害対策問題は、政治性がないと記されています。確かに、20世紀初頭の社会では殆ど政治性がなかったと言えます。公害問題が政治性を持つようになったそもそもの発端は、レイチェル・カーソンの物語でありました。

レイチェル・カーソンは、マサチューセッツ州の魚類野生生物局に勤務していた女性生物学者で、生涯を独身で過ごした人でありましたが、彼女は猫をこよなく愛していました。彼女がタイプライターを打っている傍らには、いつも猫がいました。彼女は、そのような生活を無上の喜びとして優れた作品を沢山発表して行ったのであります。

その中に『沈黙の春』"Silent spring"という作品がありましたが、この作品が、現在の公害問題の出発点となったのであります。

実は、この作品を書いた動機が、彼女がこよなく愛した猫でありました。或る時、彼女は、世の中の猫達が変な死に方をしたり、狂ったようにおかしくなって死んでいくのに気がつきました。何故だろうと彼女がその原因を調べたところ、それは、農薬による土壌の汚染が原因であることが判りました。彼女は、この状態を放置すると愛する猫の命だけの問題ではなく人間の命の問題にもなり、ひいてはこの世に生きとし生けるもの全ての命の問題にもなるのだと思って、『沈黙の春』"Silent spring"という本を書いて世の中に警告を発したのであります。

農薬によって土壌が汚染されれば、猫のみならず鳥も人間も死に絶えて、春になっても鳥も囀らない沈黙の死の世界になってしまう、というのであります。

勿論、このような本が出版されれば、農薬を作っている会社は困りますから、彼女に対して色々な迫害を加えました。しかし、彼女は、それに屈せず、農薬使用の禁止、公害の予防を提唱し続けた結果、やがて、それが市民運動となり、現在の諸々の公害対策にまで発展したのであります。正に政治性の問題は流動的なのであります。

10. 『団体奉仕と政治問題』 その3

今、地球の環境保全の問題は、京都議定書に象徴されるように公害の分野に止まらず、色々な分野にわたり、グローバルに論議されています。技術革新の現代においては、化学万能の考え方が効率のみを重んじるあまり、自然の摂理に反して地球環境を破壊しています。私達人間は、自然に対し、常に謙虚でなければならないと思うのであります。

そして、その反省と共に、レイチェル・カーソンのように、個人の力がやがて全体を動かすこともまた忘れてはならないと思うのであります。

今日の社会では、公害対策問題は極めて政治性が強いので、屢々、住民の政治課題となります。したがって、ロータリーがこの種類の問題と取り組む場合に、団体的な社会奉仕の実践が行える範囲というものは、極めて難しい課題を含んでいるのであります。

では、具体的にはどのような形で実践出来るのか、と言いますと、先ず第一に、職業奉仕の分野であります。社会奉仕では実践出来ません。それぞれのロータリアンが、自分の企業、自分の同業者に問いかけて、同業組合を動かすのであります。そして、自分の企業管理の課程を通じて、出来るだけ公害源をなくすように努力するのであります。

ロータリーは、科学を裁き、文明を裁くことは出来ませんから、今までの過去のところは一切問いません。過去の科学や文明に支えられて、現在の社会が発展して来ているので

ありますから、今になって、お前の会社は公害で地域社会を汚染している、と責められる筋合いのことではないのであります。ロータリーは、科学を裁くことは出来ないのであります。一定の科学の上に乗っかって、現在の社会が営まれているという事実を承認しなければならぬのであります。

ただ、私達は、現在及び未来に生きているが故に、その結果論から判断して、ロータリーは、一定の足りないところを是正していくという機能を果たすわけでありまして。

公害企業と関係のないロータリアンが、【ロータリーの友】あたりで、『ロータリアンが公害をで出すとは何事であるか』とか『過去に亘って贖罪せよ』などと言ってはならないのであります。兎にも角にも公害源は出てしまっているものであり、今まではそこまで関心が届かなかったのでありますから、そのを問うてはならないのであります。

ただ、公害が発生した以上は、出来るだけ早い機会に同業者に呼びかけて、自分の企業も公害をなく素用に努力する、これが職業奉仕の実践なのであります。

第2に、何はともあれ公害源から被害者が出てしまった時は、速やかに被害者の救済を事後的に行うべきであります。以上の二つ以外は、奉仕の実践プログラムを組むことは絶対に出来ないのであります。以上で『政治問題』は終わっておきます。

11. 『国際奉仕』 その1

20世紀初頭のロータリアンは、ロータリーの奉仕について、原理的に二つの世界に分けて考えていました。これを奉仕の2分類法と言います。即ち、

一つは、クラブ例会で奉仕の心を作る世界であり、他の一つは、例会以外のところで行動を起こす世界、即ち、実践を行うべき世界であります。

したがって、この時点では、今日で言うところの社会奉仕、職業奉仕、国際奉仕などという区別は無く、全ての奉仕の実践を一括して単に奉仕、即ち、Community serviceと称していたのであります。

実は、奉仕の実践を社会奉仕、国際奉仕、職業奉仕、そしてクラブ奉仕と四つに割る所謂奉仕の4分類法が出来上がったのは、1927年のことであります。

ところが、あらゆる原則には例外がありまして、国際奉仕だけは、奉仕の2分類法のただ一つの例外として、第1次世界大戦後の1919年に国際大会の決議をもってその概念が確立されたのであります。これは、当時の2分類法の世界で、一つのハブニングとして生まれ出た概念でありました。

そこで、先ず、国際奉仕論の論点は一体何か、について論点を整理しておきます。

1. 第1の論点は、世界中には、国家と呼ばれる最高、絶対且つ無責任の団体が乱立

し、利害の対立するときは、力の行使をもってこれを解決しようとします。これが戦争であります。このような国家間の利害の対立の中で、個人の善意をもって解決すべき奉仕の実践類型を国際奉仕というのであります。

2. 第2に、国家間の利害の対立を越えて、戦争では決着のつかない新しい問題即ち、南北問題が出て来ました。ロータリーは、この問題に対するロータリアンの個人の善意の働きかけの分野を1962年、世界社会奉仕WCSと呼んだのであります。

3. 第3に、ロータリーは、国際奉仕のニーズを解決する方便の問題として、ロータリー財団という制度を作り上げました。これは、ロータリーの原理としては問題のあるところではありますが、しかし、今日、ロータリー財団は、立派な仕事をしているので、私達の腹構えを作るためにも理解を深めなければならない分野であります。

4. 最後に第4の論点として、クラブが事業計画として企画立案実施する国際奉仕及び世界社会奉仕のプログラムとロータリーの本願である個人奉仕の問題があります。

最後の4. は実践総論のテーマでありますから、国際奉仕論プロパーの問題としては議論しないことに致します。以上が国際奉仕論の論点であります。

12. 『国際奉仕』 その2

今回は、国際奉仕の話をするについて、先ず、その三つの論点を指摘しておきました。さて、ロータリーの生まれる前、1648年にウエストファリア条約をもって近代国家が成立しました。そして、ロータリーは、1907年、世のため人のための奉仕活動を始めましたが、その時既に、近代国家は、成立していて戦争を始めていたのであります。世界史的な視野で見れば、その後も現在に至るまで、戦争は絶えることはありません。

ところで、世界大戦は、国家と国家の戦争であり、一方、ロータリーは、個人と個人の善意を結ぶ運動であります。しかし、個人は、皆国籍を持っています。したがって、徴兵制度によって戦争に行かなければなりません。

そこで、ロータリアンは、戦争に行って、他の国のロータリアンを殺すことをもって正義の実現と考えられるか、という問題があります。個人の善意を提唱する問題と国家間の利害の対立する問題とが交錯した時、国益の異なる二つの国に所属するロータリアンの友情というものは、非常に複雑な多層的な判断を強いられることとなります。

第2次世界大戦の始まる前に、日本のロータリアンがポール・ハリスに『アメリカが日本に対して冷たいので何とかして欲しい』と直訴に及んだところ、ポール・ハリスが渋い顔をして、『ロータリーというものは、国と国

との諍いには干渉しないのが建前だからね』と言って口がへの字に曲がったと言われていきます。

そこで、『ポール・ハリスは日本のロータリアンに対して冷たい』という報告が入っているのであります。

しかし、この問題は、このように理解してはならないのでありまして、国家と国家との利害関係の対立の問題と、個人と個人の善意を広めて行こうというロータリー運動の本願の立場とは、その国益が対立するときには多層的な複雑な問題を起こさざるを得ないということを得ておかなければならないのであります。

これは、かなり難しい問題であります。アメリカ政府と日本国政府との間に起こってくる紛争にロータリークラブ群が巻き込まれるようなことがあっても、本来、個人の善意を中心に物事を考えて行くべきロータリー運動としては、政府間の問題については、ポール・ハリスが解決出来る筋合いのことではないのであります。

したがって、ポール・ハリスが冷たい、などということは、筋違いのことでありまして、日本の戦前のロータリアンの場合にあっても、国際奉仕についての理解が足りないばかりにそのような印象論となって出たのではないかと思うのであります。

13. 『国際奉仕』 その3

戦争が勃発した場合には、ロータリークラブはどのように対処すべきか？賛成すればよいのか、反対すればよいのか？と言うと、それは、個別具体的には、無関係でなければなりません。何故なら、標準クラブ定款第12条の「政治禁」の原則によって、クラブは一切の公共問題から中立でなければならぬからであります。

では、一人々々のロータリアンはどのように対処すればよいのか？

ロータリアンは、政治的なイデオロギーから自由でありますから、戦争に賛成のロータリアンがあってもよいし、反対のロータリアンがあってもよい。条件付き賛成や条件付き反対があってもよいのであります。このように、色々な立場をとることは、それぞれのロータリアンの思想・良心の自由に属することでありまして、ロータリークラブは、これに対して何も関係がないと考えればよいのであります。

そこで、兎に角、戦争が起こってしまった場合に、『私は戦争に賛成だから、敵のロータリアンも殺すよ。奉仕はしないよ。』というのではいけないので、戦争の勃発そのものには、ロータリークラブは元来何の関係もありませんが、戦争という異常状態を奉仕の実践の場として考えなければならぬ、という考え方が出てくるわけでありまして。

ロータリアンは、クラブ例会を出た瞬間か

ら、ありとあらゆる社会状況を奉仕の実践の場として捉えなければならぬのであります。その社会状況には、正常な場合もあれば、異常な場合もあります。したがって、戦争という異常事態が起こった場合には、それを奉仕の実践の場と捉えなければならぬのであります。

この様な考え方が、ごく自然に国際奉仕の実践に入っていくことの出来た大きな原因であったと理解出来るのであります。

ロータリーは、戦争の勃発については直接の責任はありません。しかし、戦争状態が起こった以上は、それを奉仕の実践の場と考えよう、ということなのであります。

ところで、第1次世界大戦当時、アメリカの初期ロータリークラブ群は、どのような実践・行動をしたのでしょうか？

ロータリー運動は、戦争という社会の異常状態の中で、個人の善意の支配する分野を確立しようとするものとして、非常に熱の入った運動をしたのであります。

1. 出征軍人の慰問、激励（弱者救済の思想）
 2. 人種差別の排除（倫理運動の思想）端的に言うとも反村八分運動をしたのであります。
 3. 傷病兵の慰問、激励（弱者救済の思想）
- 以上が、第1次大戦当時のアメリカのクラブ群の実践活動でありました。

14. 『国際奉仕』 その4

前回に述べた第1次大戦時のアメリカのロータリークラブ群の実践活動の中で特筆すべきは、人種差別の排除即ち、端的に言うところ反村八分運動（倫理運動）であります。

アメリカは人種の坩堝でありますから、アメリカがドイツに宣戦を布告すると、ドイツ系アメリカ人が大変不利益な取扱を受けたのであります。ロータリアンは、自分の動ける範囲で動いたのであります。即ち、反村八分運動をしたのであります。

しかし、話は変わりますが、第2次世界大戦の時は、アメリカのロータリアンの力が弱っていたために、日系アメリカ人に対する迫害がひどかったのであります。したがって、日系アメリカ人はアメリカに対して非常な怨念をもちました。例えば、

或るアメリカの日系一世は、白人を絶対に信用しないのであります。彼は、中々腕のある植木屋であります。白人に対する料金と東洋人に対する料金と二つの料金表を持っていて、白人に対する料金はべらぼうに高いのであります。

『それは日本の武士道からしてフェアでないよ』と言いますと、『何を言っているんだい貴方。第2次世界大戦の時に私が白人から受けたあの苦しみ、あの苦しみに対して、白人は私に償うべきだ。その償い料が私の植木屋の料金表の中に入っているんだ』

と言って、東洋人のために仕事をする場合よりも10倍の値段をチャージして、
『嫌ならいいんですよ。この地域社会の中

で、私くらい良い仕事の出来る職人はいないのだから、嫌ならよその人のところに行きなさい』と言うのであります。

彼は、『私は、白人を信じない。人類平等だとか、人を愛するとか、キリスト教精神だとか、色々なことは言う。しかし、白人と有色人種との利害が対立するとき、彼らは、訳もなく白人優位の結論を採る。これは、私の体験に照らして明らかである。したがって、私は、白人に対しては通常の料金では仕事をしない。そして、私には、彼らが私の技術なしには生きていけないだけの良質な技術がある。私が高い料金を取って何処が悪いのだ』と言います。これは、国際理解の難しさを如実に示している物語であります。

ただ、アメリカは、戦後1988年、日系人が第2次世界大戦中に被った不利益に対して国家賠償をしております。この点、アメリカはフェアであります。即ち、

- A. 強制収容措置をした日系人に対し、1人2万ドル、合計15億ドルの補償をする。
- B. 日系人に対する処遇の歴史をアメリカ国民に教育するための基金の設定をする。
- C. 国として正式の謝罪を行う。『歴史は消し去れるものではない。しかし、我々が今為さねばならぬことは、懺悔の念を表明し、アメリカの価値を再確認することである。』として国家賠償をしているのであります。

15. 『国際奉仕』 その5

国際奉仕という概念は、ロータリーの世界にどのような経緯で生まれてきたのか。

第1次世界大戦当時のロータリアンが国際奉仕の実践活動をしていながら頭の中で整理の出来なかった問題は、奉仕の実践活動とクラブのテリトリーとの関係でありました。

テリトリーというのは、クラブの活動限界であって、団体奉仕は其中でしか実践出来ません。しかし、ロータリーの奉仕は、個人奉仕が本体でありますから、テリトリーに拘束されることはありません。その人の現在地が奉仕の実践の場でありますから、個人奉仕は何処でも自由闊達に実践出来るのであります。

ところが、当時のロータリアンは、この点の原理的な分析が出来ていませんでしたので、クラブの活動限界をロータリアン個人の活動限界と混同していたのであります。

例えば、フランスでの傷病兵の慰問・激励は奉仕の実践になるのでありますが、しかし、これをアメリカのロータリアンが行おうということになりますと、それは、自分の国から遙かに遠い外国で効果が上がる奉仕の実践活動にならざるを得ませんので、この種類の奉仕の実践活動をロータリーの奉仕と見てよいのか、という疑問が起こりました。

元来、ロータリーの奉仕というのは、ごく常識的に考えれば、自分達が住んでいる地域社会の中における奉仕でありますから、これ

が外国で起こるということになると、果たしてこれがロータリーの奉仕の適正な実践になり得るのだろうか、という疑問が当時のロータリアンの頭の中にあつたのであります。

そこで、1919年、世界大戦直後のソルトレイクシティの国際大会で、この種類の奉仕の実践をロータリーの正当な奉仕として確認する決議を取り付けたのであります。これがロータリーにおける国際奉仕という概念が認められた最初の出来事でありました。

では、1919年のソルトレイクシティの国際大会の決議の特徴は何かと言いますと、国際奉仕というのは、ロータリーが個人の善意をもって戦争という異常状態を少しずつ消していくものである、というのが1919年の国際大会の決議であります。

したがって、この決議は、戦争が起こると国際奉仕の実践の機会が与えられる。これをロータリーの正当な奉仕類型として認めようという考え方でありました。

そこで、戦争が起こらないと国際奉仕の実践は出来ないのか、という原理的反省が出てきます。戦争が起こって国際奉仕の実践があるという原因結果論の考え方ではなくて、個人の善意の支配する分野を少しずつ広げていくというロータリー運動の立場からすると、戦争の有無は、付随的な事柄ではないのか、国際奉仕の本質そのものは一体何か、ということ进行分析しておかなければなりません。

16. 『国際奉仕』 その6

国際社会も含めて社会の異常状態には、貧困、災害、戦争等様々なものがあります。その異常状態を個人の善意をもって少しずつ消していく作業をロータリーの奉仕の実践というのであります。そうだとすれば、戦争の有る無しに関わりなく国際奉仕の実践は有り得るのではないかと？また、災害や貧困の問題についても国際奉仕の実践はあり得るのではないかと？国際奉仕の本質は一体何か、を把握しなければなりません。

そこで、ロータリーは、沈黙考します。国を越えた良質な人達の関係、まずはロータリアン相互の関係、次にロータリアン以外の人達との関係で善意と善意とを繋いで行くというロータリー運動の中で、ロータリーは、国籍、文化伝統そして人間の皮膚の色が異なっても、その皮膚の内側に流れている血は共通に赤いということ認識すれば、国際的な善意を広げていく過程において戦争を予防出来ると考えたのであります。

しかし、果たしてそうなるのでありましようか？これについては、ロータリーの国家観がその前提問題にあるのであります。

では、ロータリーの国家観とは、一体どのようなものか。

ロータリーの根本原理は、個人と個人が心を通わせること（親睦）であります。この個人と個人の心の連結概念をロータリーは善意というのであります。この善意（親睦）の功徳をロータリーは家庭、地域社会、職業社会

そして国際社会へと広げていきます。

そして、国際社会では、先ず一人一人のロータリアンが善意を自覚し、善意によって外国の人達に働きかけます。このようにして、国際社会の人間が全て善意によって結びつけられたならば戦争は起こらない、とロータリーは考えたのであります。これは、国家というものを人民・国民の集合（総体）とみる限り正しいのであります。

しかし、国家とは、人民が集まった集合体（総体）だけではありません。人民が集まっただけでは、それは烏合の衆にすぎません。これを国家という統一体にするためには主権とか統治権というプラスアルファがなければなりません。

では、このプラスアルファは一体何処にあるのか？ロータリーは「プラスアルファは、国民一人一人の心の中に宿る」「国家とは、所詮、国民のことである」という立場をとるのであります。したがって、一人一人の国民が、自分の理性の命ずるところに従って自分の徳性を磨くと、その徳性の総和は、必ず国の政治に反映し、国家の徳性が上がってくる。国家の徳性が上がってくると、国と国との戦争を予防出来るではないかと？ロータリーは考えるのであります。これがロータリーの国家観であり、「ロータリーは、一人一人のロータリアンの心の中に宿る」と考えるのであります。

17. 『国際奉仕』 その7

前々回に申し述べましたように、1919年のソルトレイクシティの国際大会の決議は、戦争が起ると国際奉仕の実践の機会が与えられるから、これをロータリーの正統な奉仕類型として認めようという考え方でありました。そうすると、戦争が起らないと国際奉仕の実践は出来ないのか、という原理的反省が出てきました。

そこで、ロータリーは沈思黙考した結果、ロータリー運動というものは、戦争の有無に関わらず、地球上の全ての人達を個人の善意をもって繋いでいくところにロータリー運動の本願がある、という認識が出来上がったのであります。

そこで、ロータリーは、1921年、個人の善意の世界に立って、地球上の全ての人達を善意で繋いでいく運動としてロータリー運動を捉えようと考えました。

戦争の有無に関わらず、一人一人のロータリアンが人と人とを善意で結ぶという考え方で、国際社会の全ての人達とお付き合いをしたときに、ロータリー運動にもし力があれば、国際的な理解と親善と平和を保障することが出来る、と考えたのであります。

この考え方からすると、1919年のソルトレイクシティの国際大会の決議は、誠に現象的で本質を見ない考え方であり、次元が低いと言わざるを得ないのであります。

戦争に関係なく、ロータリアン一人一人の心を良質化していくという作業が国際的に進

められた場合には、戦争の防止と世界人類の恒久的平和という大願目が達成されるだろうという自覚が生まれて、1921年、スコットランドのエディンバラの国際大会の決議によって、このことが正式な文章になるに至ったのであります。そして、その文章は、そのままの形で、ロータリーの綱領の第4に記されているのであります。即ち、

『奉仕の理想に結ばれた、事業と専門職種に携わる人の世界的親交によって、国際間の理解と親善と平和を推進すること』。目下これに代わる文章はないのであります。

実は、このエディンバラの国際大会は、初期のロータリーが、原理的に絶頂期を迎えるようになった時に開催されたものであります。そして、この国際大会において、国際奉仕についての原理に則った定義が初めて与えられたということは、大変意義深いものであります。

この国際奉仕の決議は、まさに初期ロータリーの原理の集大成のハイライトの一つとして宣言せられるに至ったのでありまして、これが、今日の国際奉仕の意味する全てのものであることを理解しなければならないのであります。これは永遠不変の原理の宣言でありまして、どんなに時代が変わろうとも、国際奉仕の実践としては、個人の善意と善意を結ぶこと以外のものはないと言わなければならないのであります。

18. 『会員増強について』 その1

先日のクラブフォーラムにおいて、会員増強の意見として、どのような人を当クラブに入会させるかについての情報は、入会後間もない新入会員の方が情報を熟知しているので、この人達に推薦させた方が会員増強の効果が上がるのではないかと、との発言がありました。しかし、これは、ロータリーの伝統的な考え方としては、絶対に採ることの出来ない考え方であります。何故かと言いますと、例えば、伝統に輝く或るクラブでは、入会後10年未満の会員には、新会員を推薦することを認めないのであります。それは入会後日も浅い会員は、未だロータリーをよく理解していないので、このような会員に新会員を推薦させるとロータリーの解っていない会員が入会するからであります。

昔のロータリークラブが如何に会員増強に慎重であったかという例を挙げておきます。昔、私の友人が戦前に創立された伝統のあるクラブに入会することになり、推薦者から入会前のロータリー教育を受けることになりました。

推薦者が朝9時に私の会社に来なさいというので、彼が朝9時に推薦者の会社へ行ったところ、推薦者は、ロータリーの歴史、思想、原理そして実践などについて夕方4時まで延々と説き聞かせたそうであります。彼は、閉口してしまいましたが、そのまま黙って帰るのも悪いと思い、一つ質問をしました。すると、推薦者は、「貴方は未だ何も解っていない。もう一度明朝9時に来なさい」ということになって、また翌日、朝9時から午後4時まで講義を聴かされてやっと入会することが

出来たと言っておりました。

会員一人を入会させるために何故ここまで厳しくするのか。

それは、例え1人でもロータリーに適しない人が入会すると、何億円にも代え難いほど大切な「クラブの親睦」が壊されてしまうからであります。「自分達のクラブは自分達で作りに上げていく」これをクラブ自治権と言いますが、まさにクラブ自治権を確立するため、会員選考を厳しくするのであります。

会員を入会前に徹底的に教育して、この人ならば自分達の仲間にしても、他の会員に迷惑をかけないだろうということを確認してから入会させるのであります。このように考えますと、新会員を推薦する会員の責任は重大であります。もし、誤ってロータリーに適しない人が入会してしまうと、推薦者は誰だ、ということになって責任を追及されることになるのであります。

このように会員の選考を厳格にすることによって、良質なロータリアンばかりが集まることになり、ロータリーの本当の親睦、いわゆる「精神的親睦」が出来上がるのであり、クラブ自治権が確立されるのであります。

昨今これほど厳しく会員を選考するクラブは見あたらなくなりました。むしろ、ガバナーの会員増強の声に押されて、誰彼かまわず、お願い申して入会させてしまおうという風潮があります。このように会員の質を無視すると、クラブの親睦の質が落ち、奉仕の実効性が弱くなってロータリーが衰退するのであります。

19. 『会員増強について』 その2

会員増強について、会員の質を重視すべきか、量の増大を重視すべきかの議論は、誠に古くて新しい問題であります。結論として言えば、私は、質を重視すべきであると考えています。何故ならば、会員の質を無視すると、ロータリーは崩壊すると考えるからです。

昔、神戸クラブの直木太一郎パストガバナーが『今しばし拡大をやめて、今居るロータリアンの原石を磨く時ではないか』と警告されたこの言葉は今でも金言であります。

戦前に創立された或るクラブでは、ロータリアンの質を高めるために、新しい会員を入会させるに際し、クラブ理事会その他の会員選考手続のあとで、会長・幹事及びロータリー情報委員長が新会員候補者夫妻と食事を共にする機会を設けています。これは、新会員をクラブに迎え入れるに際して、新会員が自分達のクラブの仲間として相応しい人かどうかを審査する意味を持っています。一人でも自分達の仲間として相応しくない人、ロータリアンとして相応しくない人が入会すると、何億円出しても購い得ないほど大切なクラブの親睦が壊れてしまうからです。即ち、自分達のクラブは自分達で守る、というクラブ自治権を確立するために会員の選考を厳格にしているのです。したがって、会員の増強は、絶対に安易にするべきものではないのであります。

この意味において、クラブというものは本来閉鎖的なものであります。そして、ロータリーは、一業一会員制の原則によって異質なものを排除し、良質な人達だけが集まることによって良質な親睦を醸成し、その親睦のエネルギーによって良質な奉仕を実践しようとするものなのであります。

このように、クラブというものは、本来、会員だけの親睦の場であります。会員の奥様と雖もみだりに入れるべきではありません。但し、メイクアップのビジターだけは、必ず受け入れなければなりません。これがロータリークラブの基本原理であります。

古きよき時代のロータリークラブでは、会員の質を高めるために色々と工夫をしています。例えば、或るクラブでは、例会場正面にグリーンのテーブルクロスのかかっているテーブルが二つあります。そのテーブルには、入会后6ヶ月未満の新会員が座ることになっているのであります。そして、パストガバナー、元会長、情報委員長等ロータリー経験の深い人達が一緒に座って、毎週口コミでロータリアン教育をしていくのであります。これも、クラブ自治権のもとに、自分の仲間の質を高めるためにロータリアン教育に力をいれているのであります。このようにしてクラブ自治権を確立することが第一義であり、会員の増強には、あくまでも慎重でなければならないのであります。

20. 『クラブ財政と会員増強は無関係』

先日のクラブフォーラムでクラブ会費の問題が取り上げられましたが、その論点の一つは、クラブ経費が不足する、即ち、クラブの財政が赤字になるので会員を増強しようという点でありました。

しかし、クラブ経費の不足、即ち、クラブの財政が赤字になる場合、それを補うにはクラブの会費を増額する以外に方法はないのでありまして、クラブの経費不足とクラブの会員増強とは何らの関係もないのであります。したがって、クラブ経費の不足を補うために会員を増やすという論理は、全く筋が通らないと思うのであります。

元来、ロータリークラブの会費というものは、クラブの1年間の必要経費を会員数の頭数で割って、各会員が均分平等に負担するというものでありまして、クラブ会長だからといって会費が高いわけではなく、新入会員の会費が安いのもありません。会費は、全ての会員が同じ金額を均分平等に負担するのであります。

このようにクラブの財産権を皆で共有しているが故に、発言権も平等となるのであります。したがって、30年在籍のバストガバナーも、昨日入会したばかりの新入会員もロータリーの世界では平等対等なのであります。

ただ一点注意すべきは、平等対等の世界にあっても「親しき仲にも礼儀あり」という言葉があるように年長者に対する礼を失しては

なりません。

このように、均分平等なクラブの会費によって、クラブの財政が成り立っているのですから、もし、クラブの会費収入だけでは、1年間の必要経費が不足するというのであれば、会費を値上げする以外に方法はないのであります。

ロータリークラブは、営利団体ではありませんから、会費収入以外に利益を計上することは出来ないのであります。即ち、会費収入と必要経費の支出とが収支相償うのが原則でありますから、必要経費は、その会計年度1年間で使い切るのが原則であります。

必要経費を会員数の頭数で割ったものが会費でありますから、仮に会員増強によって頭数が増えたとしても、その会員分の必要経費が増えるだけであって、会員が増えたことによってクラブの財政が豊かになる筋合いのものではありません。したがって、クラブの財政が赤字になるのであれば会費を値上げする以外に方法はないのでありまして、クラブ財政の赤字と会員増強とは何の関係もないことなのであります。

会員増強の課題は、あくまでも良質な会員を選考することであり、会員の数だけを増やすことではありません。みだりに会員を増やすと、良質でない会員が入会する可能性があります、ロータリーが衰退することになります。

21. 『例会出席の意味』

スイスの片田舎で、お婆さんが箆の中に羊の毛を入れて、それを綺麗な小川の流りに浸して洗っていました。そこへ牧師さんが通りかかりました。

『お婆さん。貴女は、毎週日曜日に教会に来て私の説教を聞いているから、さぞかし、よい話を沢山覚えただろうね。』と聞きました。

『ところが牧師さん。幾らよい話を聞いても、すぐ忘れてしまいますから、何も覚えていませんよ。でも、私は、それでよいと思いますよ。牧師さん。この箆の中を見てください。箆の中には、ドンドン水が入って来ますが、すぐ箆の外へ流れ去ります。しかし、そのために箆の中の羊の毛は、こんなに綺麗になっているではありませんか。私も牧師さんの話を聞いては忘れ、聞いては忘れてしまいますが、それで私の心も少しは綺麗になっていると思いますよ。』(齊木亀次郎氏 1967.10.29.RI.368地区協議会講演)

この話は、一体何を意味するのかと言いますと、聞いては忘れ、聞いては忘れながら、水で洗われる箆の中の羊の毛のように、自分自身が磨かれていく、心が磨かれていくことを意味しているのであります。

したがって、私達は、忘れることを怖れてはなりません。出来るだけ沢山の人の話を聞き、沢山の本を読み、そして、聞いては忘れ、読んで忘れちゃうものであります。しかし、何回も何回も、聞き忘れ、読み忘れな

がら、次第に自分自身が磨かれて、次第にロータリーが身に付いていく、奉仕の心が身に付いていくのであります。

これが「知恵」というものであります。単なる「知識」ではないのであります。

したがって、ロータリーは、毎週例会に出席せよというのであります。ロータリーが寄付団体であれば、毎週例会に出る必要はありません。例会は月に1回でもよい。2ヶ月に1回でもよい。極端なことを言えば、例会に出席しなくても寄付さえしておればよいのであります。ロータリーは寄付団体ではありません。倫理団体であります。

したがって、クリスチャンが毎週日曜日に教会に行き、神に祈り、心を洗うのと同じように、ロータリアンも必ず毎週一回の例会に出席して、お互いに心を磨き合うのであります。これがロータリーの基本原理であります。

それは何故かと言いますと、ロータリー運動が倫理運動だからであります。世のため人のために倫理を提唱していくためには、先ず、ロータリアン自身の心を磨かなければ、ロータリアン自身の倫理を高めなければ、世の中に倫理を提唱することはできません。

したがって、ロータリーは、毎週例会に出席せよというのであります。ロータリアンは、毎週の例会でお互いに心を磨き合い、お互いを高め合うのであります。

22. 『ロータリアンとは』

昔、西宮クラブに入会して僅か6年目にして当地区のガバナーになられた今田恵パストガバナーは、ロータリアンとは、第1に、正業をもった職業人であること。第2に、成人の男子であること。そして今ひとつ大切なことは第3に、ユーモアを語り、ユーモアを解する人であること。と説いておられます。

ロータリアンの条件としては、なかなか洒落た定義だと思います。この三つの条件のうち、成人の男子であること、という条件は、1986年、女性会員の誕生によってなくなりましたので、現在では、ユーモアを語り、ユーモアを解する人であること、というのがロータリアンとして大切な条件となっています。

元来、ロータリークラブは社交クラブでありますから、先ず、基本的に楽しくなければなりません。したがって、ロータリアンがユーモアを解することは、非常に大切なことなのであります。ユーモアのつもりが駄洒落となったり、人の揚げ足をとったりするようでは困るのであります。

ところが、最近のロータリーは、口を開けば、会員増強とか寄付の要請ばかりでユーモラスでなくなって来ました。これではロータリーライフを満喫することは出来ません。

では、ロータリアンとは、本来、どのような人であるべきでしょうか。

1923年の国際ロータリー会長ガイ・ガン

ディカー Guy Gundaker は、1916年の著書「ロータリー通解」において、「ロータリークラブの会員を真のロータリアンに改善すること」という1章を設けていますが、その冒頭において「ロータリーは上辺だけの人間を作るものではなく、人間の体質改善を行うものである。ロータリーの内部で体験を積むにつれて、人はロータリアンになる」と述べています。ロータリークラブに入会しただけでは、それはロータリークラブの会員ではあっても、未だロータリアンとは言えないというのであります。

これは、とりもなおさず、単なるロータリークラブの会員とロータリアンと呼ぶべき会員とを峻別していることを意味します。厳しい言葉であります。

更に、彼は、「ロータリアン達は物思う人でなければならない。ロータリアン達は、深い思索に立って多面的なロータリーを追求し、そして、ロータリアン以外の人達には見えない事柄を見透さなければならない。」とも述べています

昔、「ロータリアンの中にもっとロータリーを」というターゲットが掲げられたことがありましたが、私達は、Guy Gundakerの謂う「真のロータリアン」になるために、己の足らざるところを謙虚に反省しなければならないと思うのであります。

R I 会長代理挨拶並びに R I 現況報告

2006.2.1

深川 純一

R I 第2680地区の深川でございます。この度、カール・ヴィルヘルム・ステンハマー会長の代理として、歴史と伝統に輝く御当地2580地区の地区大会に参加させて頂くことになりました。

古宮誠一ガバナー初め板橋敏雄元R I 理事ご夫妻、田中作次元R I 理事、そして、地区内外のガバナー、パストガバナー、ガバナーエレクト、ガバナーノミニーその他沢山のロータリアンのご臨席のもとでお話申し上げることは、誠に光栄でありますと共に、身の引き締まる思いでございます。御覧の通りの若輩でございますので、どうかよろしくお付き合いのほどお願い申し上げます。

さて、御当地、東京というところは、ロータリーの歴代指導者を輩出しておられるところであります。先ず第一に、日本ロータリーの創始者米山梅吉先生、日本の第4代ガバナー朝吹常吉パストガバナー、Extention King ロータリー拡大の神様と言われた柏原孫左右衛門パストガバナー、職業奉仕の権化といわれた神守源一郎パストガバナー、その他、東京と聞いただけで、様々な人達を思い起こすことが出来るのでありまして、誠に枚挙にいとまがないほどであります。したがって、私達ロータリアンは、これら歴代の先輩達の知恵に謙虚に学ばなければならないと思うのであります。

実は、今日は、今から約52分間の時間をいただいておりますが、若干時間をオーバーするかも知れませんが、その点、お許しをいただきたいと思います。

さて、ステンハマー会長の代理としての私の重要な任務の一つは、ステンハマー会長のお心を皆様方にお伝えすることです。

ただ、ステンハマー会長のお心を伝える前に、当地区におけるただ一人のR I の役員である古宮ガバナーのお考えも少し申し述べたいと思います。

私は、古宮ガバナーのガバナー月信を第8号まで全て拝見し、熟読玩味致しました。そしてある種の感動を覚えました。

古宮ガバナーは、誠に判りやすい言葉で、諄々と説き来たり、説き去る、その真摯な態度に、私は限りなき共感を覚えたのであります。これも、昨年暮に親しくお目にかかったとき、静かなお話振りと体温を感じさせるような暖かいお人柄のためかとも思うのであります。

就中、今年度のR I のテーマであります"Service above self"「超我の奉仕」の解説や職業奉仕についての造詣の深さに心から敬意を表する次第であります。

殊に、職業奉仕については、神守源一郎パストガバナーや佐藤千寿パストガバナーの言葉を引用され、誠に判りやすく解説されているのであります。

実は、一昨日、古宮ガバナーの月信第8号を頂きました。皆さん、このガバナー月信第8号は、是非読んで頂きたいと思います。

古宮ガバナーが、月信の巻頭言で、諄々とロータリーの基本原理を説いておられます。実に、簡潔にして要領を得た論説であります。

そして、その次の第3ページに、当代随一

の論客、佐藤千寿バスターガバナーが、今から32年前のご自分のガバナー時代の『ガバナー告示』を引用されて、素晴らしい論説を述べておられますが、それを読んで驚きました。佐藤先生が32年前に警告されたことが、そのまま今の世の中に当てはまるのであります。

佐藤先生のガバナーとしてのターゲットは『生きる喜びを発見しよう』というものであります。そして、冒頭から次のように述べてられます。即ち、

『願みて戦後30年。未だ曾ってない永い平和の中に、言論、集会あらゆる意味の自由を謳歌し、想像を絶する経済成長を遂げながら、果たして人は、生きる喜びに朝夕を迎えているでしょうか。』

「人生の目的は何か。それは、大臣になることでも、大将になることでもない。朝、目が覚めた時、あゝ、今日も生きている、……と胸を抜けて、精一杯生きている喜びを噛みしめることの出来る生活、そういう生き方をすることだ」

曾って、少年の日、私はある日、何気なく手にした書物の中で、或る文士の凡そこのような意味の言葉を発見し、はげしい心の昂りを覚えました。

由来、これは、私の人生の指針となったのではあります。人間にとって仕合わせとは、そういう生き方をすることにほかなりません。

然らば、今日の我々の生活の実態はどうでしょうか。物質的には、我々は幾十倍も豊かになりました。然し、我々は幾十倍も仕合わせになったのでしょうか。

否。むしろ、物質の豊かさに反比例して、精神は貧しく、そして、荒廃し、暗い、冷たい虚無の風におののいては、刹那の享楽に一

時を逃避しているのではありませんか。』

と呼びかけておられます。

また、佐藤先生は、William C.Carter元R I 会長の言葉を引用されて、

『カーター会長は、「生活の質」という問題をテーマにしましたが、我々の生活の質は、果たしてどうなったでしょうか。』

皆さん、この30年に及ぶ永い自由と平和と繁栄の果てに、今、全ての人の胸の中を吹き抜ける、空しい、不気味な、冷たい風……これは一体どうしたことなのか。』

とも呼びかけておられます。

これが実は、今から32年前の論説であります。これは、今の世の中にそのまま当てはまります。私は、この卓見に驚愕の念を禁じ得ませんでした。

さて、話を戻します。

古宮ガバナーは、この地区大会を「簡素にして充実した大会」にしたいと言っておられます。誠にもっともなことでありまして、これは、古宮ガバナーの謙虚にして暖かいお人柄の現れであります。

ところで、最近の地区大会はどうでしょうか。徒らに金を遣い、徒らに派手になっている地区大会もなきにしもあらずであります。今回の地区大会は、必ずや、「簡素にして充実した地区大会」として有終の美を飾られることを祈っております。

さて、ステンハマー会長の横顔だとか会長の今年度の方針等は、既に、ロータリーの友7月号に於いて詳細に紹介されていますので割愛致しまして、ここでは、会長が触れておられないことで、しかも、会長が重要視されていることについてお話を申し上げたいと思

います。

ところで、今年度、ステンハマー会長の提唱するR Iのテーマは"Service above self"であります。これは、現在、日本語訳では「超我の奉仕」と訳されていますが、"Service above self"という言葉が生まれ出る前に、1911年の第2回全米ロータリークラブ連合大会において、ミネアポリスロータリークラブの初代会長Benjamin Franklin Collinsが提唱した"Service,Not self"という標語がありました。

このような歴史的因縁を考えますと、"Service above self"は、「超我の奉仕」と訳すよりは、私はむしろ、日本ロータリーの創立者米山梅吉先生が訳された「サービス第一、自己第二」という翻訳の方が適切ではないかと思うのであります。何故かと申しますと、「超我の奉仕」という言葉には、むしろ"Service,Not self"に近いニュアンスがあるからであります。

ところで、Benjamin Franklin Collinsが"Service,Not self"という言葉をどのような心で遣ったかにつきましては、もとよりそれはBenjamin Franklin Collinsのみの知るところであります。

しかし、英米法学者の説くところによりますと、"Service,Not self"という言葉は、英語系国民の慣例に従って解釈しますと、"Not self"即ち、自己犠牲の奉仕を説くものであって、その根底に流れる思想は、中世神学の思想以外の何ものでもない優れて宗教的な思想なのであります。

しかし、その後、1920年頃、自己犠牲は行き過ぎではないか。我々には厳然として自我Selfがあるではないか。それを否定するのはおかしいのではないか。

ロータリーは宗教ではない。自己犠牲などと宗教的なことを言って貰っては困る。という反省の中から、誰言うことなく、selfのabove上にServiceを考えよう、即ち、"Service above self"に変わって行ったのであります。

一説によれば、それを提唱したのは、ロータリーの哲人A. F. シェルドンであるとも言われています。

したがって、もともと、"Service above self"という言葉には、その思想の底流として、自己犠牲の意味があることを忘れてはならないと思うのであります。

したがって、"Service above self"の前の標語が"Service,Not self"であったことから言えば、"Service above self"の訳語は、「超我の奉仕」と訳すよりは、米山さんの翻訳「奉仕第一、自己第二」の方が訳語のニュアンスとしては適切ではないかと思うのであります。このことについては、古宮ガバナーのも同じ解釈のようであります。

これが、文化概念としてのロータリーの解釈であります。ロータリーは、文化概念であって、数理の概念ではないのであります。

しかし、"Service,Not self"の思想がロータリーの思想の世界からなくなったではありません。ロータリーの思想の世界では、"Service,Not self"の思想と"Service above self"の思想とは、共に排斥し合うことなく併存しているのであります。これが、ロータリーの思想の世界の特色であります。

1959～60年度のR I会長ハロルドT・トーマスが「ロータリーモザイク」という本を書きました。モザイクとはガラスの破片であります。赤や黄や青や緑の美しいガラスの破片が集まって、美しいモザイク模様を作ってい

ると同じように、ロータリーの思想の世界も、様々な思想が互いに排斥することなく共存して、美しいモザイク模様を形作っているとハロルド・トーマスは見たのであります。これが、この本を「ロータリーモザイク」と名付けた由来であります。

したがって、ロータリーの歴史の流れのどの段階を切ってみても、その横断面には、様々な思想の混在が見られるのであります。

恰も、滔々とながれる大河の如く、様々な思想が共存しながら滔々と流れて現在に至る思想の潮流を形作っているのであります。

このように、全ての思想が互いに排斥することなく共存している世界。これは、『ロータリーは寛容の中に宿る』と悟ったポール・ハリスの『ロータリー寛容論』の思想の境地と相通ずるものなのであります。

そこで、「Service above self」「サービス第一、自己第二」は、自分のことはさて置いて、先ず第一に世のため人のためのことを考えようというのであります。したがって、この言葉を生みだした直接の動機は、職業奉仕的な思考ではありましたが、しかし、この言葉の根底に流れる思想は、職業奉仕だけではなく、クラブ奉仕、社会奉仕、国際奉仕、更には世界社会奉仕というロータリーの奉仕・Serviceの全てを包摂する思想なのであります。

したがって、「奉仕第一、自己第二」自分のことより、先ず人のことを考えよう、と言うことは、これを換言すれば「人の幸せを祈ろう」ということになるのであります。

ステンハマー会長は、国際協議会において、今年度の方針として、識字率、教育、水の保全を始め色々の提唱をしておられます。この提唱を一言で集約すれば、会長の心は、

世界中の全ての人達が幸せになること、世界中の人達の幸せを祈る心なのであります。

実は、1962～63年度の国際ロータリー会長、インドのカルカッタ・ロータリークラブから出ました偉大な思想家、ニティッシュ・ラハリー元会長は、

『世界中の何処かの片隅に、一人でも不幸な人がある限り、我々ロータリアンは、永久に幸せになることが出来ない。心の中に火を燃やそう。Kindle the spark within !』

というターゲットを打ち上げました。これをロータリアンの心構えとして集約すれば、世界中の全ての人達の幸せを祈る、ということになるのであります。

さて、1月はロータリー理解推進月間であります。ステンハマー会長は、ロータリーの活動を理解することは大切なことだと提唱しておられます。

そこで、ロータリーを理解するためにどうしても心に留めておかなければならないことは、ロータリー運動は、実は倫理運動である、ということでもあります。

ロータリークラブは、寄付団体ではございません。慈善団体でもございません。ボランティア団体でもございません。ロータリークラブは、社交クラブとしてロータリアンに奉仕の心を育て、世の中に倫理を提唱していくべき使命をもった団体なのであります。

比喩的な話を致しますと、例えば、街角にタバコの吸い殻が落ちていたとします。ロータリアンとしては、町を美しくするためにそれを避けて通ることはできません。必ずその吸い殻を拾うでしょう。しかし、ロータリーは、そこにロータリーの本願はないよ、と言います。タバコの吸い殻を拾うことは避けて

通ることができないにも拘らず、それを拾うことにロータリーの本願はない、と言うと、一体どこにロータリーの本願があるのか。

ロータリーの本願は、そもそもタバコの吸い殻を捨てない人を育てるところに本願があると言うのであります。人を育てること、道徳を守る人間を作ること、その事によって世のため人のために動いて行こう、とロータリーは言うのであります。

見方を変えれば、それがまさにロータリーが倫理運動だと言うことを意味するのであります。

この点を捉えて、ある学者は、「ロータリーとは、人類文化史が20世紀の時代に刻印を打った職業人の最も優れた倫理運動である」と断言しているのであります。この倫理運動であるという視点を見失いますと、ロータリーというものが判らなくなるのであります。

では、ロータリーが倫理運動であるということが、一体どこに書いてあるのかと申しますと、標準ロータリークラブ定款第4条の「ロータリーの綱領」を見ますと、ロータリーがまさに倫理運動である、ということが一目瞭然に諒解できるだろうと思うのであります。

ロータリーは、倫理運動でありますから、昔から、色々な理念を提唱し、様々な原理を開発して来ました。したがって、ロータリーというものは、20世紀初頭以来、先輩達が素晴らしい知恵を残してくれているのであります。まさにこれは、先輩達の尊い知恵の結晶なのであります。

ところで、昨年の国際協議会で、RIBI副会長のマイク・ウエブ氏は、ステンハマー

会長から依頼されて、「倫理と指導者」というテーマでその考察の幾つかを話しておられます。

このことは、ステンハマー会長が、2003-04年度の会長ビチャイ・ラタクル元会長と同じくロータリーの職業倫理に強い関心を持っておられることを示しているのであります。

マイク・ウエブ副会長は、「ロータリーというこの素晴らしい運動には、今様々な変化が起こっている。ロータリーは、地域社会や世界全体の考え方や習慣の変化を大きく反映させてきた。しかし、ロータリー創立当初の理念は、未だ真実であり、特に、倫理についてのロータリーの綱領の第2「事業及び専門職務の道徳的水準を高めること」という言葉は、今も真実である」と言っておられます。

また、「英語では、倫理と指導者は、非常に似た二つの言葉によって、表裏一体に絡み合っています。それは、PrincipleとPrincipalです」

そして、「倫理 Principle は羅針盤のようなものです。それは、何時も向かうべき方向を示しています。その読み方さえ知っていれば、私達は迷ったり、混乱したりすることはありません」と言っておられます。

「ロータリアンが倫理的に行動することの責任は、一体誰にあるのでしょうか。それは、私達全員であり、単に地区ガバナーやクラブ会長にあるものではありません。ロータリアンの一人ひとりが、各自の行動に責任があるのです」

「ロータリアンには、自分の行動の最終責任があります。倫理的に行動するか否かを決めるのは、ロータリアン自身です。自己反省は、倫理の非常に重要な構成要素です。」

「ロータリアンは、私生活や職場、そして

ロータリーの活動において、倫理的に行動することの必要性を説かなければなりません。ロータリアンは、人生のあらゆる側面において確固とした倫理的行動の提唱者でなければなりません』

とも言うておられるのであります。

しかし、現実の私達の職業社会はどうでしょうか。ロータリーが倫理運動であることが全く機能していないかに見受けられるのであります。

重ねて申し上げます。ロータリーは倫理運動であります。そして、この運動体を形成しているものは、皆、職業人であります。したがって、ロータリー運動の中核には職業倫理があるのであります。

このように、ロータリアンは職業人として職業社会に倫理を提唱し、実践していくべき使命を持っているのであります。したがって、ロータリアンが職業倫理を身につけることは、ロータリアンであるための絶対条件なのであります。そして、ロータリアンがその職業倫理を職業社会に提唱し、実践していくことは、ロータリー運動の中核的要素なのであります。

ところが、最近の私達の職業社会の現状を見ますと、ロータリーが倫理運動であることが殆ど機能していないかのように見受けられるのであります。即ち、

最近、企業の不祥事が頻発しています。その結果、例え優良な企業であっても、マスコミの厳しい批判に曝されて、一瞬にして企業の信用を失墜して消滅する事例があります。例えば、

1. 牛肉の産地・品質の偽装という不当な原産国表示をした雪印食品は、偽装表示が発

覚してからわずか1ヶ月後に会社の解散を決定しております。そして、親会社である雪印乳業も「雪印」というブランドを放棄せざるを得なくなりました。

2. また、家畜伝染病予防法違反の浅田農産は、鳥インフルエンザの発生を隠蔽したことが発覚してから僅か3ヶ月後に廃業を決定しています。

3. 最も新しいところでは、姉齒一級建築士の構造計算改竄による耐震強度偽装事件があります。

その他、職業倫理に違反した事件は、誠に枚挙に暇がないのであります。

これらの現象は、特に1990年代のバブル崩壊後、従来的高度経済成長の矛盾から生じた現象であり、経営者や従業員の職業倫理の衰退が原因であると考えられるのであります。

ところで、昨今、これらの事例を集約して、コンプライアンス、法令遵守ということが提唱されています。

しかし、法令を守るということは、人間として当たり前のことでありまして、法令というものは、人間として守るべき倫理の最低基準を示すものに過ぎません。したがって、法令を守っておればよいというレベルの問題ではないのであります。

実は、ロータリーの提唱する職業倫理は、このようなレベルの低いものではありません。法令遵守よりも遙かにレベルの高い倫理基準を提唱するものなのであります。

「ロータリーのロータリーたる所以は職業奉仕の実践にあり」と言われるように、ロータリーは、20世紀初頭以来、職業奉仕の実践について、誠に高潔な職業倫理を提唱してきたのであります。

そして、この倫理的行動の究極にあるもの

は、宗教の世界であり、先程申し上げました自己犠牲の世界であります。そして、自己犠牲という言葉の根底に流れる思想は「愛」であります。このことは、ポール・ハリスはじめ1923年のRI会長ガイ・ガンディカー Guy Gundaker、1912年の国際ロータリークラブ連合会初代会長グレンC・ミード Glenn C. Meed ほかロータリーの殆どの指導者の説くところであります。そして、この「愛」の発現形態は、「人々の幸せを祈ること」なのであります。

このように致しまして、ロータリー運動というものは、倫理運動であります。そこで、ロータリーが倫理運動であるならば、ロータリアンは、世のため人のために奉仕を実践をする際にどのような心構えが必要かということについて一つの物語を紹介しておきます。

この話は、今、日本カソリック学校協会の会長をしておられると思いますが、以前は、岡山ノートルダム清心女子大学の学長をしておられました渡辺和子先生に聞いた話であります。渡辺和子先生は、私が所属しているRI第2680地区のRYLAに来て、若者達に親しく話して下さいました。

あと1ヶ月余りで2、26事件の起きた日が参ります。昭和11年2月26日、陸軍の青年将校達が反乱を起こした日であります。この時、反乱軍に殺された人に、教育総監渡辺錠太郎大将がいました。渡辺大将には、当時、小学生のお嬢さんがいました。それが渡辺和子先生であります。

ところで、反乱軍が渡辺邸に侵入してきたとき、渡辺大将は、お嬢さんの渡辺和子先生と書斎におられたのですが、反乱軍が書斎に入ってきたとき、渡辺大将は、咄嗟にお嬢さ

んを机の下に隠しました。そこへ、反乱軍が入って来て、渡辺大将に43発の軽機関銃の銃弾を浴びせ、銃剣で滅多突きにして殺してしまつたのであります。

和子先生は、1メートルと離れていない目の前で、お父様を殺されてしまったのでありますが、このことが動機となって、カソリックの信仰に入られたのかと思つていましたが、先生のお話を聞くとそうではないと言つておられました。

実は、30歳になると、もう修道女にはなれないのでありますが、先生は、29歳になるまで外資系の会社で、部下をもつエリートな立場におられたのであります。

しかし、感ずるところがあつて、29歳にしてカソリックの信仰の道に入られました。

そして、修道女としてアメリカのボストンに渡られたときの話であります。

暑い夏の或る日、食堂で約130人位の夕食のために、皿とナイフとフォークをテーブルにセットする仕事をしておられました。その時、先輩のシスターが先生に、「シスター、貴女は、今、何を考えていますか」とお尋ねになりました。

先生は、「何も考えていません」とお答えになりました。すると、その先輩のシスターは、厳しい顔になって、「貴女は、時間を無駄にしています」と言われました。先生は自分の耳を疑つたそうであります。「何故？」

すると、その先輩は、「同じく、お皿とナイフとフォークを並べるのであれば、やがてその席にお座りになる人のために、何故、心の中で「お幸せに！」と祈りながら並べないのですか。何も考えないで、ただ漫然とお皿とフォークとナイフを並べるということは、時間を無駄にしています」と諭されたそうであ

ります。

渡辺先生は、『私は、今まで如何に効率的に仕事をするか、ということをお教えされてきましたが、時間に愛を込める、仕事に愛を込めるということは、初めて教わりました。

時間に愛を込めること、お皿は同じ早さで、同じ姿で並びます。しかし、目に見えない大切なものが込められるか、込められないかによって、世の中は大きく変わるといふこと、それは一つには、私がお幸せにと祈って置いたお皿で召し上がった方は、必ずお幸せになるという信仰であります。

ただ、それよりも私にとって大切なことは、私が救われたということ、つまり、私にとって、つまらない仕事はなくなったということ、お皿並べというつまらない仕事、雑用だと思っていた仕事は実はそうではない。雑用は、私が仕事を雑にした時に雑用になるということをお教えされました。だから、救われたのは私です。

つまらないと思ってお皿を置く、お幸せにと祈ってお皿を置く。外から見た限りは全く同じに見えます。かかった時間も変わらない。しかし、仕事の量は同じでも、仕事の質が変わっている、ということは、その人自身が変わったということです』と述懐しておられました。

お皿を並べるというつまらない行為に愛を込めるように、自分の仕事に愛を込める。私達の全ての行動に愛を込めるということは、言い換えれば、倫理的な生活をしなさい、ということでもあります。これは人を育てる基本前提であります。

このように、心の問題を重視するのがロー

タリーの奉仕なのであります。したがって、渡辺先生の言葉は、ロータリーの奉仕の基本的な考え方を示しているのであります。仕事に愛を込める、時間に愛を込める、そのことなくして倫理的な人間を育てることは出来ないと思うのであります。

イギリスでは、『ロータリーは、人間の魂の在り方の問題である』とも言われているように、ロータリーの奉仕は、心の問題を重視する優れて精神的な奉仕なのであります。

渡辺先生は、お皿を並べるという単純な行為に、「幸せを祈るという目に見えない大切なものが籠められるか籠められないかによって、世の中は大きく変わる」と言われました。

このことについて、私の考えを少し補足しておきます。

これは、私達一人一人の心の問題であります。一人一人の心の中にあるものによって世の中が大きく変わっていくのであります。

例えば、1989年にソビエト連邦が崩壊しました。あの原因は何かと言うと、ソビエトの国民一人ひとりの心の中にあつた小さな小さな不満であります。まさに、心の中にあつた小さな小さな不満が積もり積もって、モスクワにおける民衆の暴動に際して一気に爆発し、遂にソビエト連邦という巨大な主権国家を崩壊させてしまったのであります。

このように、国民一人ひとりの心の中にあるものが世の中を大きく変えていくのであります。渡辺先生が、お皿を並べるというつまらない行為に、「幸せを祈るという目に見えない大切なものが籠められるか、籠められないかによって、世の中は大きく変わる」と言われたことと全く同じことなのであります。

要するに、私達一人ひとりの心の中に宿るもの、それが大事なのであります。

このことのロータリー的な意味を若干補足しておきます。

ロータリーでは、毎年、国際ロータリーの会長が、自分の個人的な所信の表明として、ターゲットを出して来ました。私の好きなターゲットは、1960-61年度の国際ロータリー会長エド・マクローリン (J.Edd McLaughlin) の” You are ROTARY” というターゲットであります。即ち、” You are ROTARY” 貴方がロータリーですよ。ロータリーというのは、国際ロータリーのことではない、ロータリークラブのことでもない。あなた方一人ひとりのロータリアンの心の中に宿るもの、それがロータリーなのですよ、と呼びかけているのであります。

実は、これは優れて英米法的な発想なのであります。アメリカ・イギリスの法律、即ち、英米法的なものの考え方によれば、国家というものは、政府でもない、国会でもない、国民一人ひとりの心の中に宿るものだと考えるのであります。即ち、

英米法の考え方では、国家とは国民の総体であると考えます。しかし、国民が一億人集まっても、それだけでは烏合の衆に過ぎません。この人間の集団を国家という統一体にするためには、主権や統治権などのプラスアルファがなければなりません。

ヨーロッパ大陸法の考え方によれば、国家は、領土、国民及び統治組織によって成り立つと考えるのでありますが、英米法は、国家とは領土と国民だけで成り立つと考えるのであります。

では、この主権や統治組織等のプラスアルファは一体何処にあるのか、と言いますと、英米法は、一億人の国民の一人ひとりの心の中に宿る、即ち、一人一人の国民に分属

する、と考えるのであります。日本国憲法の国民主権とか主権在民とかいう思想も、その根底には、この考え方があるのであります。日本では、明治の先覚者福沢諭吉先生が早くからこの考え方を採っておられました。

このように英米法は、国家とは一人ひとりの国民のことだと言う立場をとるのであります。したがって、一人ひとりの国民が理性の命ずるところに従って自分の徳性を磨けば、その徳性の総和は、必ず国の政治に反映し、国家の徳性も上がって行くと考えるのであります。国家の徳性が上がれば、あの忌まわしい戦争も予防できると考えるのであります。

ロータリーもこれと同じであって、一人ひとりのロータリアンが自分の徳性を磨く、心を磨くことによって、業界や地域社会、国際社会の徳性が磨かれ、世界中が明るくなるとマクローリン会長は説くのであります。

このように、徳性を磨く、心を磨く、ということは、先程の渡辺和子先生の話にもありましたように、私達一人一人がお互いに幸せを祈り合うことなのであります。

そして、私達ロータリアンが、そして、世界中の人達がお互いに徳性を磨き合い、幸せを祈り合う世界、そのような世界を実現することがロータリーの夢なのであります。だからこそロータリーは、倫理を提唱するのであります。

ロータリーは、まさに倫理運動でありますから、昔から、色々な理念を提唱し、様々な原理を開発して来ました。したがって、ロータリーというものは、20世紀初頭以来、先輩達が素晴らしい知恵を残してくれているのであります。まさにこれは、先輩達の尊い知恵の結晶なのであります。

したがって、ロータリアンは、20世紀初頭の先輩達に敬意を表して、その知恵に学ばなければならないと思うのであります。

RIの現況報告

ところで、このステンハマー会長のテーマは、ロータリーの現況を踏まえてのものでありますから、論旨の展開の関係上、ここでRIの現況を簡単に報告しておきます。

以下の統計資料は、RIから発表されたものであります。数字の報告は、面白くないかも知れませんが、暫くご辛抱下さいますようお願いいたします。

1. 2005年6月30日現在の会員数を世界中で見ますと、168カ国に32,507クラブがあり、会員数が1,223,297名であります。

日本国内には2,328クラブ、但し、年度末近くの2005年6月29日に2クラブが脱会しているため、実際には2005年6月30日現在のクラブ数は2,326クラブ、会員数103,276名であります。

2. 2004年6月30日現在の会員数は、世界レベルでは31,936クラブ、会員数1,219,532名であります。

日本国内には2,327クラブ、但し、年度末の2004年6月30日に1クラブが加盟し、実際には2004年6月30日現在のクラブ数は2,328クラブ、会員数106,201名であります。

3. そこで、年度末における2005年と2004年の比較をしておきます。

世界レベルでは、クラブ数は571クラブ増えており、会員数も4,765名増えています。

日本はどうかというと、クラブ数は1クラブ増えましたが、会員数は2,925名減少

しています。

次に、2005年9月30日現在のローターアクト、インターアクト及びロータリー地域社会共同体関係については、

1. ローターアクトクラブは、158の国及び地理的地域に8,099クラブあり、推定会員数は、186,277名であります。

2. インターアクトクラブは、119の国及び地理的地域に10,402クラブ、推定会員数239,246名であります。

3. ロータリー地域社会共同体は、71の国及び地理的地域に5,992団体、推定会員数137,816名であります。

最近の脱会クラブとしては、第2次世界大戦時を除いて、RIの加盟から離脱するクラブは、2000年6月29日までありませんでしたが、この日に1クラブが脱会し、その後、2002-03年度に2クラブ、2003-04年度に1クラブ、2004-05年度に5クラブ、そして今年度2005-06年度に既に3クラブが国際ロータリーから離脱しています。

クラブの合併としては、2004年規定審議会でクラブの合併に関する制定案が採択され、複数のクラブが合併できるようになりました。

これを受けて、2005年6月に既存の2クラブが1クラブになる合併申請が2件あり、承認されています。

次に、日本における最近のロータリー拡大の状況を申し上げます。

2001-02年度は11クラブ

2002-03年度は9クラブ

2003-04年度は7クラブ

2004-05年度は5クラブ

2005-06年度は2クラブの拡大がありました
たが、この状況を見ますと、漸減の傾向を見
取ることが出来ると思うのであります。

それから、2007-08年度R I 会長指名委員
会について御報告申し上げます。

昨年9月に開催されました2007-08年度R
I 会長指名委員会におきましてドナルド・オ
ズボーンDonald E.Osburn氏が指名されたの
であります。その後、R I 細則で禁止され
ている活動に違反する活動が判明しましたの
で、11月に開催されたR I 理事会で審議の
上、この指名委員会の指名を破棄し、再度12
月5日に前回の指名委員会委員以外の委員で
指名委員会を開催し、その結果、カナダのウ
イルフリッド・ウイルキンソンWilfrid J.Wilkinson
氏 (Rotary Club of Trenton, Canada) が指名
されました。

ウイルキンソンWilfrid J.Wilkinson氏は、公
認会計士ウイルキンソン・アンド・カンパニー
の共同創設者であります。2001年に退職して
以来、全国法廷会計士協会のカナダ担当コー
ディネーター及びカナダ・クインテバレース
クルの常任理事を務めてこられました。

また、Wilfrid J.Wilkinson 氏は、1962年に
ロータリアンとなり、現在、ポリオ・プラス
全国提唱顧問、ポリオ・プラス・パートナー
グループの委員として活躍中であります。以
下、詳細は省略します

なお、昨年11月のRI理事会決定事項の内、
若干のものを紹介しておきます。

1. 先ず、RI理事会は、中華人民共和国に対
するロータリー拡大の門戸を開きました。
RI会長は、公式な認可を得るため、現在、

中国政府との連絡をとり、中国における拡
大活動に指標を示しています。

また、第3450地区と協力して将来のロー
タリークラブ指導者の研修に当たる特別代
表を任命することになります。

2. 次に、ロータリー財団管理委員につい
て、R I 理事会は、今年7月1日から就任
する4名のロータリー財団管理委員の指名
に対して、ビル・ボイド会長エレクトに感
謝の意を表明しました。この4人の内
には、日本から田中作次元R I 理事が入っ
ておられます。

3. 最後に、国際大会に付いて、R I 理事会
は、2007年国際大会の開催受入地であり
ますアメリカ・ルイジアナ州ニューオーリ
ンズがハリケーン「カトリーナ」の災害の結
果、開催地を他の都市に振り替える必要が
あるとして、アメリカ・ユタ州ソルトレイ
ク・シティが、暫定的に2007年度の国際大
会の開催地に選定されました。

なお、R I 理事会は、ニューオーリンズ
を暫定的に2011年度国際大会開催 地と
して選定しました。

以上、会員の数の問題を長々と申し述べま
したが、ステンハマー会長は、国際協議会に
おいて、「会員増強は継続性の一環である」と
述べておられます。

確かに会員増強・ロータリーの拡大は、国
際ロータリーの直接関心事であります。

しかし、私個人としては、会員の数の問題
には余り関心はありません。問題は、会員の
質であります。クラブがどのような人を育て
たか、それが問題なのであります。今日ご在
席の佐藤千壽バスターガバナーがガバナーの時
の国際ロータリー会長は、ウィリアム・ロビ

ンス W,Robbins 会長であります、このロビンス会長は、

「ロータリークラブの価値というのは、そのクラブが地域社会に対してどのようなプロジェクトをしたのかということは問題ではない。最も大事なことは、そのクラブどのような人間を育てたかということに尽きる」

と言っておられます。

この視点から申しますと、私は、30年前のロータリーを思い起こすべきであろうと思うのであります。当時のロータリーは、数は少のうございました。しかし、職業人として高潔な倫理が確立していました。ロータリアンとしての誇りを漲らせていたと思います。

ところが、今はどうでしょうか。職業人の倫理は一体どうなったのでしょうか。ロータリアンとしての誇りはあるのでしょうか。先程申し上げましたように、一般社会の職業倫理の頹廃は、誠に目に余るものがあります。これに対する対策はあるのでしょうか。

問題は、ロータリークラブを強化することです。各クラブがロータリアンを徹底的に教育することです。そのことによってロータリアンの質を高めることが、倫理を高め、クラブの質を高めることになってまいります。

キップリングという作者が動物の小説を書きました。『ジャングルの法則』というのであります。その一節に、狼の群れについての文章があります。それは、

「群れの力は狼である。そして、狼の力は群れである」と言っています。

つまり、1匹の力の強いことがその群れの力を強くするのであります。その群れを構成する1匹々々が狼という強い動物だからこそ、群れ全体が強くなるのであります。

ロータリーも、ロータリークラブを構成する一人々々のロータリアンが強くなって、初めてクラブが強くなります。そして、クラブの集合体である 国際ロータリーもまた強くなるのであります。

そして、ロータリアンを強くするということは、ロータリアンの肉体を強くすることではございません。ロータリアンの内なる心を強くすることなのであります。高潔な倫理をもった人、誇り高き人を育てることなのであります。

先程申し上げましたように、イギリスでは、「ロータリーは、人間の魂の在り方の問題である」と言われておりますように、ロータリアン一人々々の内なる心を強くすることがロータリーを強化することになるのであります。

そして、そのことがロータリーの公共的イメージも高めることになるのであります。

以上、長々と申し述べて参りました。要するに、ステンハマー会長の期待は、

「全ての人の幸せを願う、そのようなロータリアンとしての思いの深さを忘れることなく、職業社会、地域社会そして世界社会に対して、今何が必要なのか、そのニーズに対してどのような奉仕の実践が必要なのか、その問題点をはっきりと自覚して行動してほしい。」ということであろうかと思うのであります。

したがって、ステンハマー会長のテーマ "Service above self" という言葉は、まさにそのことに万感の思いを込めた提唱であると私は理解しているのであります。

大変長くなりました。ステンハマー会長のお心を伝えることと、それに R I の現況報告を添えまして私の話を終わりたいと思えます。ご静聴有り難うございました。

あ と が き

「良質な原理の復活」から始まり「ロータリアンとは？」で終了するまで実に22週にわたり、今年度も「純ちゃんコーナー」を、聞き続けることが出来ました。伊丹ロータリークラブの全ての例会に出席した者だけが味わえる充足感に満たされた至福のひとつときであります。

最初に、過去5年の永きにわたり、淡々とした語り口の中に実に内容のある3分間を、我々会員に与えていただきました深川純一会員の哲学と献身的な努力に、心より敬意を申し上げます。

そして、今年度もその記録を、「純ちゃんコーナー」Part Vとして、活字にいたします。Part I からPart IVまでの輝かしい足跡に、更に新たなる足跡を重ねることが出来る喜びを、又、会員としてこの時に立ち会えることを、大変誇りに思います

今、ロータリーは激動の中にあります。原点に立ち返ることの必要性を痛切に感じるときでもあります。目指すものをしっかりと確認するときでもあります。

この小冊子を、単なる我々伊丹ロータリークラブの貴重な財産としてだけでなく、これからのロータリー活動に無くてはならない指針を示してくれるものとして、ロータリーを理解し自らを磨くためにも、全てのロータリアンに、積極的に活用されることを期待します。

最後になりましたが、重ねて深川純一会員の哲学と献身的な努力に、心より敬意を申し上げますとともに、白附義寛会長、田中義郎幹事を始め会員全ての皆様、そして発刊にご尽力いただきました事務局の方々、更には5年前にこの素晴らしい「純ちゃんコーナー」を誕生させた竹中秀夫会員に深く感謝申し上げます。

2006年8月 伊丹ロータリークラブ ロータリー情報委員会